

氏名（本籍）	泉水 紀彦
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博甲第 7479 号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	社交不安の自己認識に関する心理学的研究

主査	筑波大学准教授	博士（人間科学）	青木佐奈枝
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	森田 展彰
副査	筑波大学講師	博士（学術）	望月 聡
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	相川 充

論文の内容の要旨

（目的）

社交不安とは、対人関係や社会的生活で営んでいく中で生じる感情であり、過剰な不安は日常生活に著しい機能低下をもたらす。社交不安の理解・援助のため、社交不安傾向の高い人が社会的状況で不安を感じる認知行動的モデルが提唱されており、その中で“他者の目というフィルターを通した自分の姿（自己を社会的対象として処理）”が重要な機能を持っているとされる。本論文は、“社交不安の「自己を社会的対象として処理」する過程に着目した上で、社交不安特有の自己認識について詳細に検討することを目的とした。その際、作動自己の概念を導入し、作動自己が目標に沿って活性化する情報（自伝的記憶情報）を詳細に検討し、作動自己に活性化された情報から生成された自己イメージの機能や影響についての検討することとした。

（対象と方法）

研究協力者は全て大学生であった。合計 328 名を対象に調査と実験を行った。

（結果）

第 1 章では、社交不安の認知モデルに関する文献研究から、社会的対象としての自己の過程が重要であるが十分に検討が行われていない点を挙げ、作動自己を導入した社交不安の認知モデルが提唱された。第 2 章では、文献研究の結果を受けて本研究の目的を設定し、第 1 章と併せ理論的検討とされた。

第 3 章以降は実証的検討の結果が示された。第 3 章では、自伝的記憶想起時の視点の偏りと身体感覚情報との関連を検討するための質問紙調査の結果が示された。参加者は面接場面や発表場面といった社会的状況でのエピソードを想起すると、不安を感じた社会的状況が最近であるほど思い出す頻度が高いこと、社交不安傾向の高い人に観察者視点（あたかも外部から見たような視点）から記憶想起をするバ

バイアスはみられず、「可視的・可聴的な（他者から見えうる）身体症状」を中心に思い出しやすいことが明らかとなった。

第4章では、“自伝的記憶想起の際の自己関連情報バイアスの検討”、“社会的状況における体験と記憶想起内容との関連の検討”を目的とした実験の結果が示された。すべての参加者に同じ実験状況（スピーチ場面）を体験してもらい、数日後に再度来室し、その時の出来事を思い出してもらったところ、スピーチ場面の体験について、社交不安傾向の高い者は他者から見えている自分への関心が強く、周囲にも意識を向ける傾向があり、全体として強い不安を感じていること、緊張や不安感といった感情や、失敗した振る舞い（行動）、身体感覚といったネガティブな自己関連記憶を多く想起する傾向が明らかとなった。出来事後の反すうと想起内容の相関分析の結果から、ネガティブな自己関連情報を多く想起するバイアスは、出来事後の反すうするほど強まる傾向がみられた。生理指標には有意差はみられなかったが、自己評価、特に不安関連の身体症状を強く感じていた。

第5章では、“異なる情動価の自己イメージの内容の検討”、“異なる情動価をもつ自己イメージが不安やパフォーマンスに与える影響の検討”を目的とした実験の結果が示された。スピーチ場面の参加者の様子をビデオカメラで録画し、独立評定者に評価を求めた。社交不安傾向が高い人が生成したネガティブな自己イメージには緊張感や身体感覚が含まれており、そのイメージを保持させると統制条件と比較して不安感が高まり、他者に自分の身体症状がみえていると評価した。評定者による評価においても、ネガティブな自己イメージを保持した参加者は不安でぎこちないと評価された。自己評価と評定者評価の比較から、社交不安傾向の高い参加者は、ネガティブ条件において、赤面や発汗といった不安関連行動を過大評価し、他方、ポジティブな自己イメージを保持してもらうと、スピーチ中の不安感が高まるものの外顕的な身体症状（e.g. 赤面や手の震え）は他者に気づかれていないと報告した。

第6章では、“感覚モダリティを指定した際の自己イメージの特徴の検討”、“感覚モダリティが異なる自己イメージが不安・パフォーマンスに与える影響の検討”を目的とした実験の結果が示された。異なる自己イメージを保持したままスピーチ課題を行ってもらい、実験時のスピーチ映像の評定者評価も行った。社交不安傾向の高い人は、観察者視点からの自己イメージを生成することで、イメージ自体がネガティブな情動価を含むこと、観察者視点からの自己イメージを生成したままスピーチを行うと、現場視点からのイメージした時と比較して、不安と落ち込みが増加すること、自己の外顕的な身体症状（不安関連行動）におけるイメージの諸側面による影響は、自己評価・評定者評価いずれにおいても有意差がみられなかったことが示された。観察者視点からのイメージをすることで、不安を過大視する傾向がみられた。社交不安傾向が低い人においては、観察者視点からの自己イメージ保持を行うと評定者からスピーチが上手に見えること、現場視点からのイメージと身体感覚を意識したイメージは、スピーチ前後の不安の低減につながることも示された。

（考察）

本論文では、社交不安における自己認識（社会的対象としての自己）に作動自己の概念を導入し、自伝的記憶と自己イメージの観点から自己認識過程の精緻化を行った上記の結果から、以下の諸点について考察された。1) 作動自己が関与する自伝的記憶バイアスとして、社交不安が高い人はネガティブな自己関連情報を多く想起しやすく、見えない身体感覚（心臓の鼓動）に加え、可視的・可聴的な身体感覚を多く想起しやすい、2) 自己イメージの諸側面が持つ機能として、作動自己内にネガティブな自己イメージを保持することにより、不安の増加や他者に自分の身体症状が気づかれていると評価する傾向を高

める、3) ぎこちないふるまいや落ち着かない様子といった安全行動の増加から、周りの人から不安を感じているとみなされ、話が上手ではないと評価される、4) 観察者視点から自己イメージを生成・維持することによって、生成したイメージを不快な内容と感じ、スピーチ前後の不安を高く評価しやすくなる。

審査の結果の要旨

(批評)

社交不安の認知モデルの整理・精緻化を行い、作動自己の概念を取り入れながら自己認識を複数の要素に分けたことで実証的検討が可能になったという学術的意義と、心的イメージを基礎とした認知療法の発展や、多様な精神疾患の理解・治療法開発にも実証的な背景を提供するという臨床的意義が評価できる。特に作動自己が関与する自伝的記憶と自己イメージという二つの認知要素に分けて実験による検討を行うことで、自伝的記憶から活性化しやすい情報の傾向、不安や自己評価の悪化を引き起こしやすい自己イメージの側面が明らかになった点などが高く評価された。

平成 27 年 1 月 14 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。